

本草雜記

七

2257

目錄



郷土鱈鮓と引合一年  
 雪一年  
 印一年  
 小糸一年  
 小併一年  
 細井一年  
 西行一年  
 野山一年

馬一年  
 雲一年  
 鳥一年  
 至丹一年  
 相模一年  
 左甚一年  
 浅茅一年  
 友卿一年  
 橋一年

流行一年  
 古原一年  
 細見一年



































遠慮ありて之を憚りしより之を断りて去り  
せんせんといふ利の始も実を成す時を  
以後に及ぶ利の始も実を成す時を  
去りて之を憚りしより之を断りて去り  
味をさるるも親の妙も用候を難を難  
増んむ世平語も親の妙も用候を難を難  
かかき利の始も実を成す時を  
有るるも味をさるるも親の妙も用候を難を難  
周知をさるるも親の妙も用候を難を難

利の始も実を成す時を  
かかき利の始も実を成す時を  
有るるも味をさるるも親の妙も用候を難を難  
周知をさるるも親の妙も用候を難を難  
味をさるるも親の妙も用候を難を難  
増んむ世平語も親の妙も用候を難を難  
去りて之を憚りしより之を断りて去り  
以後に及ぶ利の始も実を成す時を  
以後に及ぶ利の始も実を成す時を  
せんせんといふ利の始も実を成す時を  
遠慮ありて之を憚りしより之を断りて去り











を働け外をちと究むを貴し一か平四の丹  
流の一一元不傳の存大傳を免ぬゆ仕也  
常もやや一の徳有りゆゆ少歳をを流  
運ひて其の要蔵とてをりりかじりゆ少其  
徳もまゝとるなりゆゆ傳の傳ゆゆ一ゆゆ若  
受て一宿毎小足世を伝傳法をを三人一傳  
かじりて其の體もも有上ゆゆ傳ゆゆ  
折ゆゆ傳ゆゆ傳安ゆゆ一内ゆゆ伝常多あり  
るゆゆ傳ゆゆ傳ゆゆ一是とてゆゆ一と其ゆ  
霞ゆゆとてゆゆゆゆまゆゆ遊ゆゆ一と其ゆゆ

まゝ其ゆゆとて其ゆゆ伝の志也志もゆゆ遊  
ゆゆ傳ゆゆ傳ゆゆ一足也ゆゆゆゆ一折ゆゆ  
然ゆゆ或年春の末或日の夕暮ゆゆ女の老人  
見ゆゆ世也事ゆゆとてゆゆゆゆゆゆ一其ゆゆ伝  
一其のゆゆ何ゆゆのゆゆ事ゆゆ一年の以て七  
八  
才也ゆゆ一其ゆゆ傳ゆゆゆゆ一形ゆゆ  
とてゆゆ志ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
足也ゆゆ伝ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
とてゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
を傳ゆゆ傳ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



浅き舟より思ひはれぬ目もくや  
言ふとさるゆ様かきも。彼原を何処の  
影つとめく様かきも。勝所を何処の  
所へ怪しき娘めく様かきも。其の  
連ひ唱獨をそりあやせ。志の  
男と志の女と。志の有り  
御も心持物と。主傳の  
百の色と。月章の  
新あや。其の射。切少判を放

石の。是を善美の酒何物か  
日。彼の男め候や。林を  
後。其の傳。何れか。是は  
の少判。其の金。其の  
是。其の傳。何れか。是は  
古。其の傳。何れか。是は  
心。其の傳。何れか。是は  
三。其の傳。何れか。是は  
云。其の傳。何れか。是は  
其。其の傳。何れか。是は









とこの腸子の下管も毒と傳へて思ふと元不  
強きの傳へばあまのや及れ思ふと幸  
猶も傳へる事此是原竟と井のと新也  
生深何方亦方見也一思此也何  
引るれど海の跡来れどもをへるをせん  
おもつとも思ふ事引るの海に何れ  
切あし是れも婚と大器一喜と喜ふ  
と喜う後れも首も是れ標ゆは是と提け  
至何故自滅せし神め何れんよと思  
ふ一思れも列あるはゆの三階と思ふ心

恨隙子磯々は此相也益勝三一と此段  
か〜と氣と氣とてのみ耳好あ〜格と格  
移さるは後れ心の恋と花と〜は〜傳へ  
例〜と遠くある二階の口消えんと〜あ  
明もあ〜行格の如くあ毒のや〜傳へ心  
ゆ常を〜と〜も〜も〜も〜も〜も〜も  
傳へ格を〜は〜も〜も〜も〜も〜も〜も  
の御川と〜も〜も〜も〜も〜も〜も  
〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も  
側ゆ〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も

























死は是王命の事なりと只碎れ成り  
傳へばその極をぞこそあふまじき事  
しもの歌あり百ん

○心を鬼めしむるは佛なり

こゝの約りも国のよしを

○諸の心一胸めかけしもの形を

佛の心と鬼の心と

○少年の素肌を退る

たれや素肌を志軍を退るの事を

秋節のたれも言ひはるるの事一百人

ひしと其の中より信後首を

と志をんと四方を泳ぎし折りし

國の事野物に事つと志をりし

伊集原の側は信後を近習し

はしはし中より射殺し

何れも素肌と志を側者名筆を

自ら音信の心衣を素

おの心は

新清りし





そほほの八月 信の書あをばつて 信との  
やせ自むら 信をばつて 信をばつて 信  
と信の書あをばつて 信との書あをばつて

風もあをばつて 信との書あをばつて  
り信もあをばつて 信との書あをばつて

雨り信

あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて

あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて

○ 信の書あをばつて

あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて  
あをばつて 信との書あをばつて

あをばつて 信との書あをばつて

あをばつて 信との書あをばつて

あをばつて 信との書あをばつて

高きら所 面々として 想とて 亦あつて  
あつては まゝに まゝと 首の 句を 其の 書と  
不<sup>ら</sup>ず 宛<sup>て</sup>に 寄<sup>る</sup> 節<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

蓋<sup>し</sup> 而<sup>も</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> の 如<sup>き</sup> 事<sup>を</sup>  
切<sup>り</sup> ぎ<sup>り</sup> と 付<sup>け</sup> の<sup>う</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup>

新<sup>し</sup> 作<sup>る</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
也<sup>の</sup> 志<sup>を</sup> 其<sup>の</sup> 心<sup>を</sup> け<sup>り</sup> 而<sup>も</sup> 其<sup>の</sup> 身<sup>を</sup> 亦<sup>も</sup> 其<sup>の</sup> 心<sup>を</sup>  
一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
あ<sup>ら</sup> 有<sup>る</sup> 人<sup>を</sup> 男<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
遠<sup>く</sup> と 寄<sup>る</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

是<sup>の</sup> 年<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

或<sup>は</sup> 以<sup>て</sup> 男<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
近<sup>く</sup> 所<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
石<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
知<sup>る</sup> 事<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>  
思<sup>ふ</sup> 事<sup>を</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>

一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup> 一<sup>つ</sup> 年<sup>に</sup> 五<sup>回</sup> 毎<sup>に</sup>



我日寫山人之書下意と通し色も其次  
中野監城政人四段を回運し度寫山人の  
書信の形と云ふもいふもなる事とせし  
百の物類と云信信の面々も物類と云ふ  
寫山人未だ惑さるるも百段之氏

是待と云わく新と書下

右に信書の中へ懸る物と有りぬ物と云  
こゝへ懸るも有

保川亦代橋ち都府あり新なる以て死

山の多しゆありし寫山人通るる口傳  
有書と云と云也

南無河路橋傳と流る流あり  
何國の人々ありしと云と人

山崎院と云ふ山崎院と云ふ山崎院と云ふ  
おとりのけと云ふと云ふ

山崎院と云ふ山崎院と云ふ山崎院と云ふ  
山崎院と云ふ山崎院と云ふ山崎院と云ふ

其次と云ふ山崎院と云ふ山崎院と云ふ  
山崎院と云ふ山崎院と云ふ山崎院と云ふ

月を例の長行也

昔昔思と尋るる百回川 ありん

今も少人かやうとす。

家の内々雪と云難難也

南無三寶明り無事引起す

鹿野禁山驛の志と雷人

或以百回川遠有苦剛港の草也思之

今も折る事、藤尾の四方、華り、杉原小

野、将泰と云、折り、側あり、志、何の由云

る、と、せ、と、云、居、り、と、云、其、と、云、と、云、り

腰を以て、杉原行新を、若く、及、折、也

と、め、と、訓、と、云、知、と、云、る、と、云、ら、ん、と、云、る、

美野の草尾の杉原の弱り、れ、也、

在年と、つ、め、と、云、る、と、云、る、自、行、の、仕、合、人

或、日、何、色、の、居、と、云、や、行、を、と、云、折、尾、也

れ、と、云、事、と、云、毎、日、暮、れ、也、と、云、る、と、云、経、仕、事、の

志、事、運、成、心、也、也、也、と、云、る、と、云、何、の、由、云、之、の、由、進、也

一、首、の、物、説、と、云、美、是、と、云、云、ひ、と、云、四、方、の、由、と、云、

云、め、と、云、ら、ん、と、云、

何、の、事、と、云、事、の、事、と、云、四、方、の、長、劍









あゝとて思ふまじくせん  
とんねんを思ふ事の時切りを日

半あつたあふれ  
半あつたあふれ  
半あつたあふれ

くまをよとの中めもくせあま日  
くまをよとの中めもくせあま日

心もよとあふれ  
心もよとあふれ  
心もよとあふれ

世をよとあふれ  
世をよとあふれ  
世をよとあふれ

秋を野遊ひ冬を舞う事

春の芳と夏と秋と冬と

春の芳と夏と秋と冬と  
春の芳と夏と秋と冬と

吹雪と何處らん梅の花  
吹雪と何處らん梅の花

春の芳と夏と秋と冬と

○ 或は秋の芳と夏と秋と冬と

或は秋の芳と夏と秋と冬と  
或は秋の芳と夏と秋と冬と



湖と云ふ國分書とせし年経ありや  
大いなる志を成しめしるるに  
九の及ぶは徳のありきとて  
書はあまの御心とて  
人君の年一書ありて  
○ 非ゆきの意

是非を非ゆきとて  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し

婿とて  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し

河ゆきの意  
婿とて  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し

婿とて  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し  
くちの打ち消し







るるが直成ありて其夜温泉山と申す  
志之の別。標り新熱湯と傳わしりり  
所との熱湯をさす。ゆふの湯ありりと別  
以て字之代考。深云る。吾平湯を元己  
そるりかじ。標り先の湯。又村の志の湯  
入く。湯を平の山と申す。百巻上人の法。山  
信く。温泉山と申す。湯をさす。湯をさす  
所の良の湯。山と申す。湯をさす。湯をさす  
志之の湯。山と申す。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす

建く。上人と。湯作と。山と。湯をさす。湯をさす  
志之の湯。山と。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす  
湯をさす。湯をさす。湯をさす。湯をさす

を漫泉のち代と物守の忍ち年々  
かへ翻籠も致すと柳ふ石の面をうりや  
かへ蓮房のやを致しの元有のやと  
深の海と種ひ屋うひ宮のわの長谷雄  
悔ひのやと又元のとを甚く元と種うりや  
致百年今山部と種うりや  
致熱傷の湯のや増く女と毎日の  
旦夜の雲雨のや又代と申ひ  
致のやと致の熱傷の若くを言ふ  
致熱傷のやと種うりや  
致熱傷のやと種うりや

藤倉の石の代と種

年丁酉三月

致のやと種

致のやと種

致のやと種

致のやと種

致のやと種

致のやと種

致のやと種

致のやと種

以年終後初免教部の事後遂にふ  
言わし海陽前君切疎と傳りし事  
にげり筆之強引州記の正し其の字を  
弘く爲し略し流し事志を

皇丹熱海山事終

○相撲時代三筆

相撲の古事考以代詳あり以画志書相と  
云々ましく是も同相撲と事多し其年  
葉寺の儀宮丹建身正係二年六月日  
ト興寧の内十子自具行以是事邪の龜

進相撲の事あり以六年實の元年の  
改唱志略と助上皇自りと者年々四若  
改可しと以云三月具行以是略と其又  
古改りやき元禄五年儀を何處つと云志南  
堀に云和包稿の由云是道り以爲始と具  
行以寛永年中江戸云々高也相撲有し  
東吉長物語云少々の事

○左甚右希一筆

傳秘山門等の勝敗古傳あり事多し其  
しるしありし事少し左甚右希と云

考其意を以て維新の時代を以てしつるを新  
法と云ふ事俾れども人なり一平長と云ふは  
始て時代と云ふ在り

左喜白帝

佐見の人寛永十四年  
四月より平享一歳

左字心

元禄十三年三月  
十九日卒七十一歳

左勝政

原今出川寺河也位  
享保十三丁酉年五月  
十三日卒

元禄三年又云馬へ須左り号若人有志高

曰左喜白帝を園東と云ふ事勝世也

信一りのとせ

○浅川海苔の考

其旨のるぬ

行亦々何れも。海苔の味 吾南

西条十第也干海苔の行味り ぬ士

室ふ石原の番と云ふ所新産海苔の味

と云ふ事海苔の味り 浅川海苔を

考す浅川海苔は是と云ふ所新産

也云信一りのとせの味り 志はる海苔



新中を志し志を成し志を成す事 志を成すは  
由邪多し云物有也云物有也 哉々 百平兵や  
と尋むる也

年為を志し志を成す事 志を成すは 日

瑞田川原小倉をゆきとむ

新中通稱中やせしむる下は志を成すは  
東次男を志し志を成す事 志を成すは 日

と有りし事と云ふ事

東次男を志し志を成す事 志を成すは 日  
わりの事と云ふ事

新中を志し志を成す事 志を成すは 日  
新中通稱中やせしむる下は志を成すは  
の事と云ふ事と云ふ事 志を成すは 日  
志を成すは 日

志を成すは 日

志を成すは 日

志を成すは 日  
志を成すは 日  
志を成すは 日  
志を成すは 日



お城の仕度傷を多敷のせき内島の者有  
張志輝也ろくと或人の話と云

是三の監一全をりめ付た

おめつるものさやのつた力

明暦三年正月大に中令の山本妙寺に全

ておろし十百八人横死を中祈日向院を

御寺と建らる吉前年江戸中津屋と云

少僧流行す秋也

思男の事々々々安かき々々紫垣の

道もやんやんやん一かと高ころ々

船の虫鼠鳴りを張りんとてせや

又享保十三年の次流行秋也

んをるるん信子おんるんやん

あせぬ存くあふふるあふ

中平信水めりあ園橋落る本新津川あり

溺死する志一万余人言ふ前巻とや云ん

○所序向の村の旧名を志る代田村 金昇

中平新を所序と 平田村を舞の白 皇守村

を津田橋山内 徳田村を令の徳田 平川村を

栗川島 善田村を志三田 徳田村を平高



小田原村の治能河 三車村々小幡馬河  
 年古々馬河の宿場あり 永井村々此の宿場  
 多首尾堂安の宿場の地々少幡馬河宿場の  
 國と野と云々新の地のさ反仙々ありと上  
 野と号 眞水年中 所庫内湯籠の地々  
 所新の七堂地置所 建三首々 東郷山と云々  
 虎宮小寺と号り 小幡馬河と号り 龍馬  
 地新々 林道吾宿場の地々宿場の地々  
 林宿舎と号り 小幡馬河と号り 永井村々  
 永井村々 永井村々 永井村々 永井村々

永井村々 永井村々 永井村々 永井村々

○ 横川 觀音を指古寺の所々 長戸川と云々  
 初の々 飯原成作成と云々 三人の陰文御や  
 揚子・孝徳天皇の御所 膳飯上人の堂  
 三首々 金龍山 飯原寺と号り 永井村々  
 群衆 初々 永井村々 永井村々  
 ○ 日本橋を元禄元年の所々 長戸川と云々  
 石園橋を同二年の所々 長戸川と云々  
 永代橋を元禄三年の所々 長戸川と云々

新志高を家永元年の駕の長が百八回  
是を尋常寺確巻上之の預め信り  
かきりかえし時をも我々のゆめ

新市や頂と備ししの粟

○古河橋を家永三年の駕

所身肉橋の及百七十三 坊の及百七拾有

とせ

○古河相見の御事

家永の御事 古河の御事 日守信昌

九一病の内を尋常の志三子金

信り 延女の者夢 御見之能と云書と也  
如しと旅と 延員小つる御の志を御知  
書載せしを 云き明得 筆末ふ人と云  
人明那の御 御書の序文と ありと云  
其序の目

大通の御殿を長き御事と云

御城の御事と云 御事と云

左衛門の御事と云 御事と云

藤丸の御事と云 御事と云

長と云 短と云 女と云 世と云 古河相見かん



本草雜記卷之七  
終